

2012年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業  
東北応援ツアー レポート C 福島県スパリゾートハワイアンズコース  
「立命館大学校友として、現地を訪問して想うこと」  
1990年 産業社会学部卒業 松下 泰之

2011年3月11日、その日から1年7か月余りが経った。

昨年、同じ政令指定都市の仙台市の区役所で、京都で担当している業務と同じに業務に派遣された。6月、8月、12月、2月、4回計3か月にわたる期間を被災地で過ごしたことになる。

前置きはこの辺にして、派遣先の仙台市を離れ、7か月経った2012年10月、我が母校の校友会が東北支援ツアーを行うということで、自分の東北での経験や実際に目にした光景、まだまだ道半ばの復興、いや復旧といった方がいいのかもしれない、そんな東北の現状を改めて振り返り、地震、津波での被害とともに、放射能の影響とはいかばかりのものか、関西に身を置くものとしてはなかなか実感することが困難な事態に実際身を置き、何が起きているのか、何が問題なのか、今後何をすればよいのかを考えてみたい。そう思い、参加を決めた。

東北支援ツアーは、福島県浜通りの他、岩手県沿岸、宮城県沿岸、福島県会津と組まれていたが、あえて福島県浜通りのツアーを選択した。

岩手県沿岸、宮城県沿岸は、昨年の仙台派遣の際、土日を利用して、レンタカーで、大船渡、陸前高田、気仙沼、南三陸町といった被災地を見て回ったということ、地震、津波の被害とともに、放射能の被害とはどのようなものかを目にしたかったのである。

当日は、派遣先であった仙台から高速バスで郡山駅へ、東北道は沿岸部を通っていないせいか、地震の影響は全く感じられない。派遣時の東北新幹線の車中から見えたブルーシートも全く見えなかった。

郡山駅で、同行の校友（職場の上司）と合流し、バスに乗り込み、全国から集まった30数人の校友と対面。卒業年度、学部、参加の動機などを自己紹介という形で披露。自分の生まれる前に卒業された方あり、数年前に卒業された方あり、老若男女、日本全国から様々な思いを持った参加者が集った。

私自身、昨年の東北への関わりは、行政職員として、区役所での勤務という形での支援であった。想いとしては、被災された地域で、ボランティアとして関わるとか、仮設住宅での高齢者のケアとか、生活している場所に接しての支援をしたいと考えていた。区役所での支援は、業務支援であり、窓口での対応、事務補助が中心となる。窓口へお越しになる方は、罹災証明書を携え、手続き

をされるわけだが、東北の方々の気性なのか、感情を前面に出してお話しされる方は少なく、穏やかな方ばかりであった。思うのだが、東北の方々はやりきれない想いとか、憤り、諦め、様々な心のうちを秘めて、表には出さないのではないだろうか。なかなか行政窓口では感じられない内に秘めた想い。それを感じてお手伝いしたい。それは今も思っている。

被災された校友からの直接のお話で、まだまだ支援が必要であると痛感するとともに、今後、これまでと違った形での支援、寄り添いの一端を担えればと感じています。今回の支援ツアーがそのきっかけになればと思います。

まだまだ復興どころではないという状況のもと、日本人として、東北へ足を向けた者として、そして東北にもたくさんの校友がいる立命館大学を卒業した者として、何ができるか、何を被災地の人々が求めているかをしっかりと把握し、今後の活動に生かしていきたい。

最後に、東北、福島を訪問する機会を作っていただいた母校校友会、段取りを整えていただいた皆様、被災され苦しんでおられる中、我々に接する機会を作っていただいた被災地の校友の皆様、充実した時間を提供いただいたスपोर्टハワイアンズのスタッフの皆様に感謝したいと思います。ありがとうございました。